清代中日学術交流の研究

王　宝平　著

汲古叢書59

汲古書院

清代中日学術交流の研究

王　宝平　著

汲古叢書59

汲古書院

著者略歴

王　宝平（おう　ほうへい　Wang bao ping）

1957年中国杭州生まれ。杭州大学外国語言文学系日本語科卒業。北京日本学研究中心修士課程修了。杭州大学講師、助教授を経て、1998年浙江大学日本文化研究所教授、2004年浙江工商大学日本文化研究所教授。この間、日本で国際日本文化研究センター客員助教授、関西大学東西学術研究所外国人研究員、四天王寺国際仏教大学客員教授、二松学舎大学大学院特任教授を務める。関西大学文学博士。

〔主要編著書〕『中国館蔵和刻本漢籍書目』（杭州大学出版社、1995）、『中国館蔵日人漢文書目』（同、1997）、『吾妻鏡補――中国人による最初の日本通史』（朋友書店、1997）、『江戸時代中国典籍流播日本之研究』（大庭脩著、共訳、杭州大学出版社、1998）、『遊歴日本図経』（『晩清東遊日記彙編』所収、上海古籍出版社、2003）、『中日詩文交流集』（同、同、2004）等

清代中日学術交流の研究

平成十七年二月二十八日　発行

著者　王　宝　平

発行者　石　坂　叡　志

整版印刷　富　士　リ　プ　ロ

発行所　汲　古　書　院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋二-五-四

電話　〇三（三二六五）九七六四

FAX　〇三（三二二二）一八四五

汲古叢書 59

ISBN4 7629 2558 6 C3320

WANG Baoping ©2005

KYUKO SHOIN Co Ltd Tokyo

序

二松學舍大学大学院教授　佐藤　保

私が北京日本学研究センター（中国名は北京日本学研究中心）の主任教授として北京に赴任したのは、一九九一年（平成三年）四月二十九日であった。同センターは、中国政府（国家教育委員会）と日本政府（外務省・国際交流基金）が協力して運営する日本学を学ぶための中国の高等教育機関で、当時は言語・文学・社会・文化の四コースをもつ大学院（修士課程）と日本語教師再教育のための研修コースが設置されていた。私の勤務は翌九二年四月三十日までのまるまる一年間、一九八五年に始まった日中特別事業の第二次五カ年計画が二年目を迎えていた時である。私が王宝平君と初めて会ったのは、このセンター主任教授の時であった。

本書末尾の「書後私語」で王君自身が記すように、北京日本学研究センター四期生の彼は、私の赴任の前年、九〇年に同センター所定の課程を修了していた。したがって、彼とはセンターの教室で一緒に勉強したことはなく、教師と学生という間柄で私たちの交際が始まったわけではない。今回、彼との初対面の時を確かめるために、当時私が個人的に書き留めていた「主任教授日誌」を調べてみると、九一

年六月十日（月）の項に、「午前一一時三〇分、杭州大学王勇・王宝平両君来室。九月の学会について話していく。」と、初めて王宝平君の名が見える。このメモ書きは、その前の週（六月七日・八日）に開かれたセンター主催の青年シンポジウム（センター修了生を主体とする学術討論会）に参加した二人が、杭州に帰る前に連れ立って主任教授室にやってきた時の記録であり、このメモからシンポジウムの時が私と王宝平君の初対面の時であったことが分かる。因みに、王勇君はセンターの一期生、王勇君との初対面もまたこの時であったに違いない。但し、メモ中の「九月の学会」についてはいま全く記憶がない。

次に王宝平君と会ったのは、「書後私語」にあるように、同年九月二十四日・二十五日の両日に行われた学位（修士）審査の面接試験（答弁）においてである。「『助語辞』及び『助語辞講義』の研究」が彼の研究テーマであった。

その後、王君と会う機会はしだいに増えていった。同年の秋十一月には、センターの招生工作（学生募集活動）のために華東地区の数大学を回る機会があり、その皮切りが王君の勤務する杭州大学であった。北京から杭州へ行く途中、同行の陳海良氏（センターの中国人スタッフの一人）から「江南二王」（江南に王勇・王宝平の二王あり）という言葉があるのを聞いて、二人の王君との再会を楽しみにしていた。杭州大学では、同大学の学生諸君を相手に模擬授業を行い、北京日本学研究センター宣伝の義務をはたしたあと、王宝平君とさまざまなことを話し合う機会があった。私はその時に初めて王宝平君という人物を理解することができたのではないかと思う。この時、王勇君とは会った記憶がないから、たぶん二王の一人は不在だったのだろう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

中国から帰国後も、王宝平君と会う機会はしばしばあった。ほとんどは彼が学会などで日本に来た折りに、私の前の職場であるお茶の水女子大学に訪ねてきてくれたもので、その都度それまでに発表した論文や書物を持ってくるのが常であった。時には「江南二王」がそろって現れたこともある。それに対して、私が日本から杭州まで出向いて行ったのは、一九九九年（平成十一年）八月の浙江大学日本文化研究所主催の国際シンポジウムに参加したときだけである。このときの大学名が杭州大学から浙江大学に変わっているのは、前年の九八年に杭州大学が浙江大学に吸収合併されたからで、二王の勤務していた杭州大学日本文化研究所もそっくり浙江大学に移っていたのである。さらに昨年の二〇〇四年（平成十六年）には、日本文化研究所だけが浙江工商大学に移ることになり、二王の現在の職場は浙江工商大学日本文化研究所である。

王宝平君は一昨年の二〇〇三年（平成十五年）四月から、二松學舍大学大学院の特任教授として勤務している。任期は二年間という約束で招いたので、今年三月末でその任期が終了する。この二年間は、彼に会ってから二松學舍大学の同僚として過ごすまでの十二年間に比べれば、私たちが話し合った時間はおそらく数十倍にのぼるだろう。この二年間は、彼の人柄と学問をより一層理解するのに極めて有効な期間であったと思う。

実は、王君を二松学舍に呼んだのは私である。二〇〇二年（平成十四年）四月に二松學舍大学大学院の専任教員になった私は、着任早々、その年から始まった文部科学省の21世紀ＣＯＥプログラムに応募する準備に取りかかった。第一回の応募の結果は不採択であったが、申請と同時に文学研究科中国学専攻

の講座制導入やカリキュラム改訂等に着手し、捲土重来、次回の募集に備えることになった。二松學舍がＣＯＥに申請すると言えば、自他共に日本漢文以外には考えられなかったので、もっぱら日本漢文関係の講座の整備やスタッフの充実を中心に準備を進めたが、現有スタッフだけでは手薄なことが歴然としていたので、日中学術交流の面から日本漢文にも詳しい王宝平君に手助けを頼もうと思いついたのである。二〇〇二年の年末近く、たまたま国際シンポジウムかなにかで来日していた王君を説得して、急遽翌年の四月から二松に来てもらうことにした。

以上が、ほぼ十四年になんなんとする私と王宝平君との交際の概要である。

本書の内容については、王君自身の「緒言」及び「書後私語」に詳しく書かれているので、いまさら私の贅言は要しまい。いずれも丹念な調査と慎重な考察をベースにした、創見に富む論考である。収録論文の多くは、上述のごとく発表のたびに読んだことのあるものではあるが、新稿も加えてこのような大部の論文集にまとまると、真に壮観と言うにふさわしい。王宝平君の優れた日本語能力と、探求心、忍耐力、律儀さ、分析力にあふれる資質が、学問研究にみごとに生かされているのである。彼はいま現在、気力、体力の充実した壮年期、今後ますます研究は広がり且つ深まって行くものと、私はかたく信じている。

また、彼は優れた研究者であるばかりか、きわめて熱心な教育者でもあることを、二松學舍大学に彼を迎えてから私は知った。たとえば、毎時間の講義や演習の周到な準備もさることながら、学生の書いたレポートを冊子にまとめて授業の締めくくりをするなど、彼の労を厭わない教えぶりは学生の信頼と

尊敬を受けており、私は二松學舍大学の学生のために彼を呼んだのはほんとうによかった、と思う。

最後にひとこと付け加えておきたい。王宝平君は日本にたくさんの師、友人、知人を持っているが、彼が今日研究者としてあるのに最も大きな影響を与えた師の一人は、いまは亡き大庭脩先生ではなかったかと思う。関西大学での学位取得を誰よりも喜んでくださるはずだった大庭先生は、王君の朗報を待たずに他界されたが、もし存命であったならば、本書の序は当然大庭先生がお書きになったに違いない。私はたまたま現在、同じ大学に勤務していること、同じ分野に関心があること、そして、これまでの長い親交から、烏滸がましくも故大庭先生の代わりをつとめることになったものと、考えている。

大庭先生の霊の安らかならんことを。

（二〇〇五年新春）

緒　言

文化交流は人とものを媒介として行われるが、ものの中で、同じ漢字文化圏にある中日の場合、書物が多大な役割を果たしたことはすでに先学の指摘する通りである。そこで、拙著は第一部「人による学術交流」と第二部「書物による学術交流」の二本の柱を立てることにした。

明治時代の中日文化交流史については、従来中国人の日本留学や日本図書の翻訳が盛んに行われた甲午戦争以降に焦点が当てられ、研究の主流となっている。それ以前の研究といえば、修好条約の締結・琉球処分・台湾出兵等の政治・外交面の考察が多い。史料の散在・亡失等によって、明治前期の中日文化交流の研究は全体として遅れを取っていると言わざるを得ない。そこで拙著の第一部はその欠を補うために、主として明治前期に来日した清人と明治人との学術交流をめぐって、中国人による日本研究・詩文往来・日本語通訳の養成といった側面にウエートを置いて考察したものである。

序章は、研究上の動機から中国人の日本研究の歴史を好奇心本位の第一段階（元まで）、倭寇対抗のための第二段階（明代）、貿易中心の第三段階（清代前期）、日本防備のための第四段階（甲午戦争まで）、日本に学ぶための第五段階（甲午戦争）に分けて概観した。その中でとりわけ第四段階に焦点を当て、紀行文時代・百科全書時代・詩文交流並行時代に細分化して論じた。

第一章と第二章は、文人による学術交流について考察している。王寅・衛寿金・王藩清・陳鴻誥・葉煒等明治前期

に来日した清国文人に絞り、詩文往来・筆談交流・著書の刊行等あまり知られなかった史実の数々を掘り起こし、明治前期に活躍した彼等の実態に迫った。

俞曲園は日本を訪れたことがないものの、中国の伝統文化の碩儒として明治日本人の憧れの対象となり、日本人と密接な交流があったため、第二章で取り扱うことにした。本章ではまず明治時代の刊行物や新聞に掲載された俞曲園関連の資料を摘出し、同時代の日本における俞曲園の存在を考察した。続いて、人口に膾炙する俞曲園編の『東瀛詩選』をめぐって、該書誕生の機運、中日図書館蔵当該本の書誌、明治日本における評価等について論考した。

第三章以下は、清国外交官による学術交流に関する考察である。第三章「明治時代における日本駐在の清国外交官」は、中国第一歴史檔案館で見つかった外交文書に基づき、初代何如璋（光緒三年・明治十年）から七代裕庚（光緒二十四年・明治三十一年）まで、日本に駐在した清国外交官の姓名・身分・月給・在任期間を表に整理した。これはその期間中に在日した外交官全名簿の初披露だと思われる。

第四章から第七章は、主に清国外交官が行なった日本研究の側面について具体的に考察したものである。第四章では、中国の日本研究の最高の到達点を示す黄遵憲『日本国志』の典拠に焦点を絞り、『芸苑日渉』『国史紀事本末』が該書に受容された史実を浮き彫りにした。

第五章は、姚文棟と東京地学協会との交流を叙述し、謎に包まれていた彼の『日本国志』を紹介したうえ、黄遵憲『日本国志』との類似関係を指摘し、両書の共通の出典が『日本地誌提要』であったことを初めて明らかにした。

第六章は、あまり注目されていなかった第三代公使徐承祖の事跡、そして同じく日本へ派遣された弟徐承礼に関する研究である。

第七章は、新しく発見した『日本環海険要図誌』について、該書の内容・出典・著者王肇鉉の事跡を中心に研究し

た。

第八章は、海外視察に派遣された遊歴官傅雲龍について考察している。看過された彼の著書を重点的に記述し、短い遊歴期間にもかかわらず多数の遊歴書を書き得た原因を探った。

第九章は、明治前期に華々しく展開された中日漢詩文の交流についての考察である。文人交流期、外交官を中心にした交流期、甲午戦争後と三つの時期に分けて論述した。さらに附録として、明治時代の刊行物で約百五十点に清人の序跋が附されていることを指摘した。これは明治前期の中日文化関係がいかに親善友好であったかを量的に立証したものである。

第十章は、第一歴史檔案館所蔵の第一次史料に基づき、清国公使館内に設置された東文学堂について、その教習・学生・月収・期限等の基礎事実を明らかにし、中国人の日本留学の起源や留学監督の設置は、甲午戦争以前に求めるべきことを論じた。

第二部は、書物による学術交流である。これは多岐にわたる研究テーマであるが、主に『助語辞』と『吾妻鏡』を取り上げ、相手国に与えた影響を考察したものである。

序章は、中国における日本書籍の記載・分類、日本書籍の中国への流入、中国人の日本図書館の視察をめぐって総括的に論じた。

第一章は、明代万暦年間の文人胡文煥と『助語辞』の版本に関する考証を行った。元代にできた中国最初の助辞関係の専門書『語助』は、胡文煥が刊行した叢書の中に『助語辞』と改名し、上梓されてから広く世に知られるようになった。これまで『助語辞』に関する先行研究はあったが、胡文煥に関する研究は欠如しており、『助語辞』の版本についても『格致叢書』本が定説のように受け止められていた。第一章では胡文煥に絞り、彼の号・著作・詩文・身

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

上・趣味・協力者・室名を考察し、彼の人物像を明らかにした。次に、紛らわしい『助語辞』の版本について詳細に考察し、『助語辞』が『百家名書』本とすべきだという結論を導いた。そして、『助語辞』の巻末に七つの語項目が欠けたその理由についても、胡文煥が故意に削除したという通説と相反して、彼が入手した際にすでに底本『語助』のこの一葉が欠けていたのだという新たな見解を示した。

第二章は、第一章の基礎研究の土台に立脚して、江戸時代における『助語辞』の流布と影響について書誌学的に探求したものである。蓬左文庫所蔵の『御書籍之目録』をもとに、『助語辞』は遅くとも元和（一六一五―一六二三）年間までに日本に伝来していたことを立証し、『江戸時代書林出版目録』等の資料に基づき、『助語辞』は江戸時代において絶えず版を重ねて翻刻され、漢学界の助辞・虚辞・実辞の研究に大きな影響を及ぼしたことを論述した。さらに、『助語辞』の位置付けを知る手がかりとして、筑波大学図書館所蔵の抄物『助語辞講義』にメスを入れて考察を試みた。最後に、江戸時代における『助語辞』受容の軌跡を素描した。

第三章と第四章は、日本の書物が中国に与えた影響に関する考察である。第三章では清代前期の中国人の日本研究の代表作とされる『吾妻鏡補』の書誌や著者翁広平について考察し、第四章では中国における『吾妻鏡』の流布と影響について分析した。康熙三年（一六六四）までに清朝へ伝来した『吾妻鏡』は、中国でいくつかの蔵本が見られ、江南の文人の間で転写し討論された。寛永通宝という日本貨幣事件が発生してからはより広範に知られるようになったが、該書が清人の心を引きつけた理由は、書名「吾妻」によるところが大きかった。この『吾妻鏡』は、『吾妻鏡補』及び中国人が著した衛生知識を宣伝した『吾妻鏡』に刺激を与え、外国の年号を扱う特色を有することで『四庫全書提要』でも好評を得た『歴代建元考』にも大いに受容されている。

第五章は、時代は前の四章と異なり明治時代になるが、第一代から第八代までの在日清国公使館の資料購買記録を

ピックアップし、資料への支出は僅少であったことを証する。また、『大清駐日本使署蔵書目』を典拠とし、一九一〇年頃の在日清国公使館の蔵書の実態を解明した。

近代史の研究者にとっては、豊富な史料に恵まれている利点がある一方、つぎつぎと図書館・檔案館へと奔走し、書物は無論、山ほどの檔案・新聞・雑誌を丹念に調べ、新史料の発掘と解読に追われる苦労が付きまとう。とくに中日学術交流史を取り扱う者にとっては、両国の史料を駆使しなければならないため、その苦労は並大抵のものではない。また、中国と日本は研究の方法や著書の構成等の面において際立った相違があり、どちらに従うべきか、しばしばその板ばさみに立たされて苦慮したことがあった。拙著は十数年にわたりその無数の苦労と格闘した成果の一端を示すもので、少しでも斯界の研究に役立てば、筆者にとっては望外の喜びである。

汲古叢書

1	秦漢財政収入の研究	山田　勝芳著	本体 16505円
2	宋代税政史研究	島居　　康著	12621円
3	中国近代製糸業史の研究	曾田　三郎著	12621円
4	明清華北定期市の研究	山根　幸夫著	7282円
5	明清史論集	中山　八郎著	12621円
6	明朝専制支配の史的構造	檀上　　寛著	13592円
7	唐代両税法研究	船越　泰次著	12621円
8	中国小説史研究－水滸伝を中心として－	中鉢　雅量著	8252円
9	唐宋変革期農業社会史研究	大澤　正昭著	8500円
10	中国古代の家と集落	堀　　敏一著	14000円
11	元代江南政治社会史研究	植松　　止著	13000円
12	明代建文朝史の研究	川越　泰博著	13000円
13	司馬遷の研究	佐藤　武敏著	12000円
14	唐の北方問題と国際秩序	石見　清裕著	14000円
15	宋代兵制史の研究	小岩井弘光著	10000円
16	魏晋南北朝時代の民族問題	川本　芳昭著	14000円
17	秦漢税役体系の研究	重近　啓樹著	8000円
18	清代農業商業化の研究	田尻　　利著	9000円
19	明代異国情報の研究	川越　泰博著	5000円
20	明清江南市鎮社会史研究	川勝　　守著	15000円
21	漢魏晋史の研究	多田　狷介著	9000円
22	春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究	江村　治樹著	22000円
23	明王朝中央統治機構の研究	阪倉　篤秀著	7000円
24	漢帝国の成立と劉邦集団	李　　開元著	9000円
25	未元仏教文化史研究	竺沙　雅章著	15000円
26	アヘン貿易論争－イギリスと中国－	新村　容子著	8500円
27	明末の流賊反乱と地域社会	吉尾　　寛著	10000円
28	宋代の皇帝権力と士大夫政治	王　瑞来著	12000円
29	明代北辺防衛体制の研究	松本　隆晴著	6500円
30	中国工業合作運動史の研究	菊池　一隆著	15000円

31	漢代都市機構の研究	佐原　康夫著	本体 13000円
32	中国近代江南の地主制研究	夏井　春喜著	20000円
33	中国古代の聚落と地方行政	池田　雄一著	15000円
34	周代国制の研究	松井　嘉徳著	9000円
35	清代財政史研究	山本　進著	7000円
36	明代郷村の紛争と秩序	中島　楽章著	10000円
37	明清時代華南地域史研究	松田　吉郎著	15000円
38	明清官僚制の研究	和田　正広著	22000円
39	唐末五代変革期の政治と経済	堀　敏一著	12000円
40	唐史論攷－氏族制と均田制－	池田　温著	近刊
41	清末日中関係史の研究	菅野　正著	8000円
42	宋代中国の法制と社会	高橋　芳郎著	8000円
43	中華民国期農村土地行政史の研究	笹川　裕史著	8000円
44	五四運動在日本	小野　信爾著	8000円
45	清代徽州地域社会史研究	熊　遠報著	8500円
46	明治前期日中学術交流の研究	陳　捷著	16000円
47	明代軍政史研究	奥山　憲夫著	8000円
48	隋唐王言の研究	中村　裕一著	10000円
49	建国大学の研究	山根　幸夫著	8000円
50	魏晋南北朝官僚制研究	窪添　慶文著	14000円
51	「対支文化事業」の研究	阿部　洋著	22000円
52	華中農村経済と近代化	弁納　才一著	9000円
53	元代知識人と地域社会	森田　憲司著	9000円
54	王権の確立と授受	大原　良通著	8500円
55	北京遷都の研究	新宮　学著	12000円
56	唐令逸文の研究	中村　裕一著	17000円
57	近代中国の地方自治と明治日本	黄　東蘭著	11000円
58	徽州商人の研究	臼井佐知子著	10000円
59	清代中日学術交流の研究	王　宝平著	11000円
60	漢代儒教の史的研究	福井　重雅著	12000円

（表示価格は2005年２月現在の本体価格）

索　引

人名索引
中国人……1
日本人……9
書名索引
中国書……16
日本書……24

凡　例

1．本索引は各章末の注を除いた本文に出現する人名・書名の索引である。
2．書名索引に一部の地図名を含む。
3．便宜上、漢訳書を中国書に、中日両国以外の人物及び図書をそれぞれ日本人及び日本書の末尾に付加する。

人名索引
中国人

あ行

于振宗　13
于徳楙　153,156
衛梓材　41
衛寿金(鋳生)　16,25～29,33,44,336,337,357,368,369
栄祿　363
易順鼎　365
袁盎(袁絲)　60
袁世凱　363
袁祖志　365
袁宝璜　159
王寅(冶梅)　16～25,33,49,336,357,361
王引之　453,569
王慧音　540
王鉞　368,369
汪婉　303
王応麟　431
汪家禧　518
王学浩　21
汪鶴筐　369
王家福　160
王輝章　156,158,160
王暁秋　16,531
王漁洋　74
王琴仙　361
汪憲　537
汪康年　365
翁広平　217,407,513～532,535,537,540,541,543,545～548,550,551
王国維　409
王谷生(維勤)　219
王克仲　458,459,461
王鯤　517
王之春　7,182,266
王而農　72
王修(季歓)　526
王充　569
王樹徳　161
王重民　468
王照　357
王松森　151
汪松坪　19,362,369
汪鍾霖　365
汪精衛　410
(王)静夫　16
翁大年　520

王達月 388,400
王治本 16,30,42,151,336,338,340,355～359,361～363,365～370
王仲華 525
王肇鉉(振夫) 156,157,265,266,270,271,273,274,282,285,287,289,290,292～297
王韜 7,25,237,357～359,361～363,366～369
翁同龢 321
王同愈 159
王仁爵 356
王仁俊 541
王藩清(体芳,琴仙) 16,29～32,42,43,336,356,357,361～363,369
王雱 308
汪鳳瀛 159
汪鳳藻(汪芝房) 156,158,350,359,363,388,389,398～402,561
王鳴昌 453
王勇 531
欧陽修 521
翁雒 519
王蘭亭 364
汪綸元 159
温彝器 527
温紹霖 157,160,161

か行

解錕元 153
何晏 309
夏偕復 391
何九盈 456,458,460
何俠雲 366
郭慶藩 370
郭少泉 42,48
郭宗儀 369
郭伝璞 41,357
郭萬俊 152
郭銘新 157,159
何璟 240
何寿朋 11,342
何紹基 43
何如璋 7,10,30,74,147,148,150,186～189,218,239,242,223,339,341,342,350,355～364,366,369,370,373～376,559,560,564
戈鯉化 370
何定求 147,150,356
葛其龍 41
葛能存 153
華蘭徴 364
関羽 31
顔元孫 308
韓履卿 520
魏維新 453,459
紀暁嵐 74
魏源 182
祁承㸁 468,469
邱瑞麟 159
邱文元 377,399
龔恩祿 366
強汝詢 364
許応騤 363
許之琪 156
許子原 143
許叔夏 520
許通 21
金嘉穗 60,362
金国璞 361,365
金其相 156,158
金采 155
金濤 527
金佩亶 151
金履祥 456
藕香榭 367
倪鴻 41
桂岩山樵 528,530
桂馥 517
計默 517
厳士琯 153,248
厳思忠 457
厳辰 11,60,345
阮祖棠 153
蹇念咸 155,363
阮丙炎 366
呉偉業 21
胡惟徳 563～565,570
胡寅 340
呉允誠 158,160,388,389,400,402
黄一夔 368
孔顥達 459
黄恩鞠 159
高郭東 536,539
洪遐昌 158
江瀚 58
黄漢 156
高玉谿 363

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com